

# IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門ニュースレター 2007年12月号 (<http://www2.iee.or.jp/~ias/kiji2007.htm>)

## 平成19年電気学会産業応用部門大会報告

谷口勝則 (大阪工業大学), 入江寿一 (大阪電気通信大学), 上田茂太 (苫小牧工業高等専門学校)  
水野勉 (信州大学), 河村篤男 (横浜国立大学), 大森英樹 (松下電器産業)  
佐々誠彦 (大阪工業大学), 大橋俊介 (関西大学), 三浦友史 (大阪大学)  
岸本圭司 (三洋電機), 山本康弘 (明電舎), 森實俊充 (大阪工業大学)

### 1. はじめに <担当: 谷口>

大阪大会の通称で広報活動を行ってきた平成19年電気学会産業応用部門大会(第21回大会)は、8月19日(日)の子供理科教室にはじまり、20日(月)~22日(水)の講演会、そして23日(木)の見学会まですべての行事を無事終了した。大会期間中、有料参加者985名(事前申込者719名、当日申込者266名)、子供理科教室参加者192名(児童112名、保護者80名)、および来賓の方々を加えると、総勢1,197名の参加者を得たことになる。

講演論文に関しては、発表セッションは55テーマ(うちシンポジウム9、オーガナイズドセッション7、YPC1、一般講演38)であり、総論文数は489件(うちYPC論文135件、ポスター発表43件)であった。これらの論文発表を、最大10室の平行セッションとして実施した。また、大会2日目の21日には2件の特別講演および懇親会を開催した。

### 2. 今大会の特徴と概要 <担当: 谷口>

大阪工業大学大宮キャンパスは大阪市内ながら、交通の便はあまりよい場所ではない。また、大会期間が夏であり、大阪の猛暑の中での開催を一番心配し、できる限り快適な会場提供ができるように関係部署に協力をお願いした。

大会の主会場は、セッション数が最大で10テーマの平行セッションとなるため、1号館の1階~5階で予備室を含め11教室を用意した。各教室は100名以上がゆったり入れる広さで、全室にプロジェクタの設備があるためPCによる発表を実施した。一部にほぼ満室のセッションがあり、ここでは無料配布したセッションペーパーが不足してご迷惑をかけたが、全般的には余裕のある部屋で熱心な研究発表が行われていた。

猛暑の中を歩いての外出を避けるため、学内食堂での特別メニューを用意し、参加者に大会期間中の無料昼食券を

配布した。初日に予測を超える利用者があり、一部は1階の別メニューに切り換えて貰ったが不満の声もなく、むしろ、無料昼食券配布という初めての試みに対して参加者から大変好評をいただいた。

YPCの論文数135件は過去最高となった。発表会場として3室を連結して広さ約380m<sup>2</sup>の部屋を用意したが、それでも狭いと感じるくらいほぼ満室の状態での白熱した討論が行われていた。また、発表する学生も他の研究発表が聞けるよう、今年から新しく発表方法を変更し、前半と後半に分けてポスター発表を行った。次代を担う若手エンジニアの発表が増えたことを喜んでいる次第である。

また、今大会では、前回の名古屋大会から導入された事業についてはできるだけ継続するよう努めたが、パネルディスカッションについては毎回実施は不向きなため、従来通り文化的な講演と専門分野の講演の2件を特別講演として行った。

今大会初の試みとして、会員外参加者に電気学会への入会を促す入会キャンペーンを実施し、正員参加費、入会金および初年度会費を合わせて、会員外参加費よりも支払い金額が1,000円安い料金設定を行った。その甲斐もあって15名の方が入会キャンペーンを利用し、新規に入会いただいた。

### 3. 論文募集と投稿件数

<3・1> 論文投稿状況 <担当: 上田> シンポジウムとオーガナイズドセッションの企画の募集は、1月12日から開始し、3月30日を締め切りとした。シンポジウムは技術委員会からの提案であるが、オーガナイズドセッションについては昨年と同様にテーマを一般から広く募集した。提案の締め切りを多少延長したが、最終的に9テーマのシンポジウム(目標15テーマ)と7テーマ(目標7テーマ)のオーガナイズドセッションの提案があった。すべて

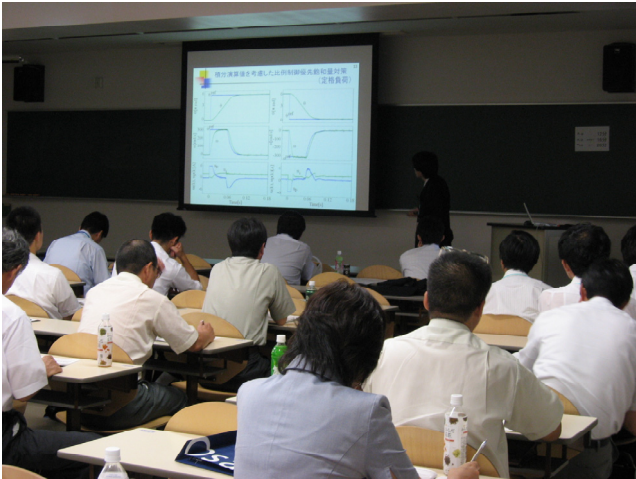


図1 オーラルセッション



図2 ポスターセッション（一般）

の論文の投稿期間は平成 19 年 4 月 9 日（月）から 5 月 11 日（金）に設定したが、最終的に 5 月 20 日（日）まで延長した。投稿締め切り後、6 月 1 日（金）に論文委員会を開催した。論文委員によりプログラムを編成し、論文発表賞の推薦の機会を公平にするため、1セッション 8 件程度となるように配慮した。また、プログラムは国際化に対応するため日英併記とした。

全論文の内訳は以下の通りである。（カッコ内は昨年）

- ・シンポジウム 9 テーマ 49 件（13 テーマ 79 件）
- ・オーガナイズドセッション 7 テーマ 38 件（7 テーマ 38 件）
- ・一般オーラルセッション 224 件（222 件）
- ・一般ポスターセッション 43 件（31 件）
- ・YPC 135 件（116 件）
- ・総計 489 件（486 件）

特徴的なのは YPC が過去最高の件数に達したことである。これに伴い YPC の発表方法については、前半後半に分ける新しい試みを行った。また、一般セッションで優秀発表賞の対象となる 35 歳以下の若手発表者（プログラム中では◎で表示）は 267 件中 189 件で、全体の 71% を占め、年々その割合は増加している（昨年 67%、一昨年 63%）。一般セッションと YPC を合わせるとさらにその割合は増え 81% に達する。若手技術者の部門大会への貢献度の高さが目立っている。今大会でもこのような 35 歳以下の若手発表者について、10% 程度を発表賞 A として表彰する。上位 9 名に本部による優秀論文発表賞 A、これに続く 10 名に産業応用部門優秀論文発表賞 A を授与する。各セッションの座長から既に当該セッションにつき候補者 1 名、合計 35 名の推薦をいただいております。論文委員会委員の投票による厳正な審査を行い、今後受賞者を決定する予定である。また、受賞者の表彰は来年の高知大会にて行う予定となっている。

〈3・2〉 シンポジウム <担当：上田> シンポジウムは産業応用部門に設置されている 13 の技術委員会に提案を依頼し、傘下の調査専門委員会、協同研究委員会などからテーマを提案していただいた。本大会のシンポジウムの

テーマは以下の通りである。

- S1 IT を利用したパワーエレクトロニクス教育と魅力ある電気工学教育への展開
- S2 マトリックスコンバータの技術動向と応用
- S3 上下水道分野における技術継承の課題と対策
- S4 誘導機の故障診断技術
- S5 これから、クルマはどう変わる？
- S6 医用アクチュエーション技術の実践
- S7 進化する電動機に対応する電動機制御技術
- S8 環境適応のためのモーション制御技術
- S9 鉄道電力供給設備と EMC

昨年に比べてテーマ数は減ったものの各分野で活発な議論が行われた。座長からのセッション状況報告書によると、聴講者が 150 名で立ち見が出たセッション（S5）もあるとのことで、全体に大変有意義なシンポジウムとなった。

### 〈3・3〉 オーガナイズドセッション <担当：上田>

昨年の大会から、新たな分野や最新の技術に関してより活発な議論を行うためオーガナイズドセッションを実施している。テーマは一般から広く募集し、オーガナイザにセッションの企画提案をしていただいた。また、本セッションの論文は招待論文とし、1 論文当たりの発表時間をより活発な議論が行えるよう一般講演より長くした。本大会のオーガナイズドセッションのテーマは以下の通りである。

- O1 人間生活支援を目的とした新しいセンサ応用技術
- O2 鉄道事業者からみた電気車技術の現状と期待
- O3 最近のエネルギー制御技術の動向
- O4 マトリックスコンバータの応用技術
- O5 パワーエレクトロニクスにおけるシミュレーション利用
- O6 高品質生活を目指す生体とメカトロニクス・コンピューティングの統合
- O7 CO<sub>2</sub> 削減のための新型発電システム

いずれも最新の興味深いテーマで、聴講者も多く非常に活発な議論が行われ、好評であった。



### 〈3-4〉 一般セッション（オーラル） 〈担当：上田〉

一般セッション（オーラル）には、224件の論文投稿があり、30セッションに分かれ、表彰式と特別講演のある2日目の午後を除いて6会場のパラレルセッションで発表が行われた。1セッション当たり論文数は8件を標準とし、1件当たりの時間は20分（発表16分、質疑応答4分が標準）とした。発表の際に使用する機器としてパソコン切り替え器を準備し、次の発表者との交替時間の短縮を図った。座長の報告によると、聴講者が100名を超えるセッションがいくつかあったものの全体的には今大会のセッション会場はどの部屋も比較的広く、快適な環境でセッションが展開された。

### 〈3-5〉 一般セッション（ポスター） 〈担当：上田〉

大会3日目の12:20-14:00にポスターセッションを開催した。43件（昨年比12件増加）の論文が8セッションに分かれて発表された。今回、パワーエレクトロニクス標準化委員会、パワー半導体モジュール標準化特別委員会、可変速駆動システム標準特別委員会及びJIS原案作成委員会からの提案で、パワーエレクトロニクス関連の規格に関する発表が2件あった。この時間帯にはオーラルセッション、シンポジウムなどを開催していないため、参加者が大変多かったが、会場が十分広くポスターの間隔に余裕をとることができたため、快適な環境で活発な討論が展開されていた。ポスターセッションでは、細かな点まで直接質問できるなどオーラルセッションにはない特長があり、発表者と参加者の双方に有意義であると考えている。

### 〈3-6〉 YPC 〈担当：水野〉

ヤングエンジニアポスターコンペティション（YPC）は高専、大学、大学院の学生や企業の若手技術者が中心となって行った研究成果を発表する場であり、参加資格は26歳以下の学生・技術者である。大会初日の12:20～15:00に135件の発表が行われた。発表者、審査員を含め520名を越える多数の参加があり、熱気のある活発なディスカッションが行われた。

各発表に対して4人の審査員により、“論文の書き方”、“論文の内容”、“ポスターの出来映え”、“説明の仕方”、

“質疑応答の様子”の5つの審査項目について審査が行われ、総得点が高い14名の優秀発表者を決定した。審査には論文委員を中心に117名の多数の皆様にご協力いただいた。審査員の方々にこの場を借りてお礼申し上げる。YPCの優秀発表賞を受賞した論文と発表者は以下の通りである。

Y-26「ソース接地形高周波インバータの駆動電力低減に関する実験検証」坂本英聖（首都大学東京）、Y-28「電力変換器における内部ノイズ電流の発生要因の検討」三谷哲也（首都大学東京）、Y-30「直接形電力変換技術を用いた絶縁型直流三相電力変換器による系統連系」林文博（長岡技術科学大学）、Y-33「Particle Swarm Optimizationを用いた太陽光発電MPPTの発電電力量測定による性能評価」遠藤次夫（上智大学）、Y-49「ビジュアルセンサによるパラメータ同定を用いた誘導モータのエンコーダレス制御」蛭子譲治（長崎大学）、Y-50「電圧飽和を考慮したPM同期モータベクトル制御の電流制御特性の改善」稲妻一哉（仙台電波工業高等専門学校）、Y-57「誘導電動機のセンサレス電流ベクトル制御高効率運転」林洋幸（徳島大学）、Y-70「二足歩行ロボットのYaw軸モーメントを考慮した歩行の高速化に関する検討」平林孝啓（横浜国立大学）、Y-96「磁石補助突極形同期機の動作解析」松井康浩（金沢工業大学）、Y-98「コアレスPMモータ350,000r/min駆動のための最適フィルタ設計」柳原裕一（東京理科大学）、Y-100「順突極永久磁石型ベアリングレスモータの線間電圧に関する考察」草柳博一（武蔵工業大学）、Y-122「2極電動機・2極軸支持構造を持つ永久磁石型超高速ベアリングレスモータにおける外乱力抑制法の検討」南保沙織（武蔵工業大学）、Y-129「アキシシャルギャップベアリングレスモータの始動時の電流の低減法」大高慎一（職業能力開発総合大学校）、Y-133「Halbach配列永久磁石軌道上の磁場分布に依存した配列バルク超電導体試料の電磁力特性の考察」佐々木修平（福島工業高等専門学校）。

受賞者は懇親会に招待され、表彰状が授与された。また、IEEE IAS Japan ChapterからIEEE IAS Japan Chapter Young Engineer Competition Awardとして図書券とIEEE年会費が贈呈された。

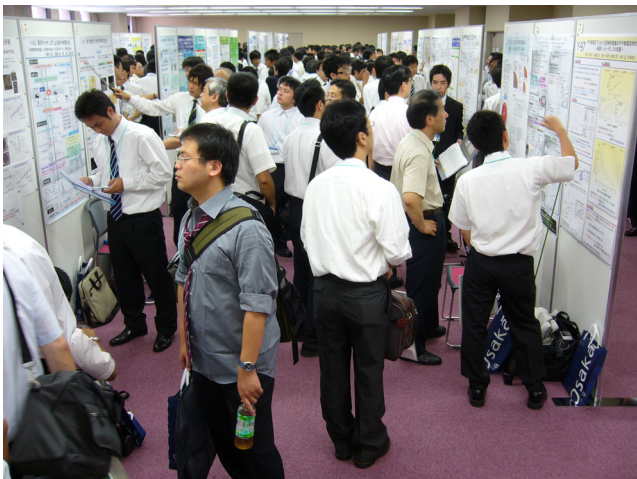


図3 活発なディスカッションが行われたYPC



図4 YPC受賞者と上田論文委員長（右端）

#### 4. 部門表彰・特別講演・懇親会

〈4・1〉 部門表彰 <担当：河村> 大会二日目の午後、大阪工業大学 OIT ホールにて産業応用部門表彰式を開催した。今回は、例年表彰する賞に加え、平成 18 年産業応用部門大会が第 20 回であったことを記念して、第 20 回記念論文賞も併せて表彰した。

今回の表彰内容と受賞者は以下の通りである。

産業応用特別賞：

- ・学術賞（副賞として宮入賞）：渡辺博巳（東京電機大学）
- ・貢献賞：福田昭治（元北海道大学）、小豆澤照男（神戸大学）
- ・技術開発賞：持永芳文（ジェイアール総研電気システム）

部門活動功労賞：

- ・平成 18 年産業部門大会：平井洋武（名古屋工業大学）、古橋武（名古屋大学）、竹下隆晴（名古屋工業大学）、森本茂雄（大阪府立大学）、岩崎誠（名古屋工業大学）
- ・ICEMS：小山純（長崎大学）、三木一郎（明治大学）、西方正司（東京電機大学）、熊野照久（明治大学）、阿部貴志（長崎大学）
- ・PCC 名古屋：大熊繁（名古屋大学）、石田宗秋（三重大学）、竹下隆晴（名古屋工業大学）、西田保幸（日本大学）、木村紀之（大阪工業大学）



図 5 学術賞受賞の渡辺先生の表彰



図 6 優秀論文発表賞受賞者

部門奨励賞（副賞として高橋勲賞）：

伊東淳一（長岡技術科学大学）、小南勉（横浜国立大学）  
優秀論文発表賞 A（産業応用部門大会）：

伊東淳一（長岡技術科学大学）、小南勉（横浜国立大学）、  
加藤修平（東京工業大学）、米山崇（鉄道総合技術研究所）、  
尾崎一博（三井造船）、比田一（三洋電機）、毛利哲（鉄  
道総合技術研究所）、只野裕吾（明電舎）

産業応用部門優秀論文発表賞（部門大会）：

泉智博（松下電工）、清水慎也（東芝キャリア）、山元純  
文（名古屋工業大学）、松本剛幸（サンケン電気）、津田  
敏宏（金沢大学大学院）、渡瀬睦巳（長岡技術科学大学）、  
吉田憲吾（東京大学大学院）、弓場井一裕（三重大学）、  
園田晃丈（長崎大学）

第 20 回記念論文賞：

- ・吉井剣、井上重徳、赤木泰文（東京工業大学）
- ・羽田野伸彦（関西電力）、岸田行盛、岩田明彦（三菱電機）
- ・桂誠一郎、大石潔（長岡技術科学大学）
- ・弓場井一裕、作石翼、平井淳之（三重大学）
- ・山崎克巳（千葉工業大学）、大木俊治、根津章、池見健（日産自動車）

表彰式では、玉井平成 18 年度表彰委員長から産業応用部門で実施している表彰内容について説明があった。続いて上記の産業応用特別賞・部門活動功労賞受賞者一人ひとりに齋藤産業応用部門長から賞状と副賞などが手渡され、産業応用特別賞受賞の 4 名の方からご挨拶をいただいた。

続いて、司会を平井平成 18 年部門大会実行委員長に交代し、同様に齋藤産業応用部門長から賞状などが部門奨励賞、優秀論文発表賞、第 20 回記念論文賞受賞者一人ひとりに手渡された。受賞者の写真撮影なども行われ、和やかな雰囲気の中に終了した。

〈4・2〉 特別講演 <担当：大森、佐々> 8 月 21 日（火）大阪工業大学 OIT ホールにて 14 時からより約 3 時間半、京都大学霊長類研究所所長の松沢哲郎氏および松下電器産業（株）デバイス環境技術担当上席理事の上野山雄氏、御両名を講師としてお迎えし特別講演を開催した。

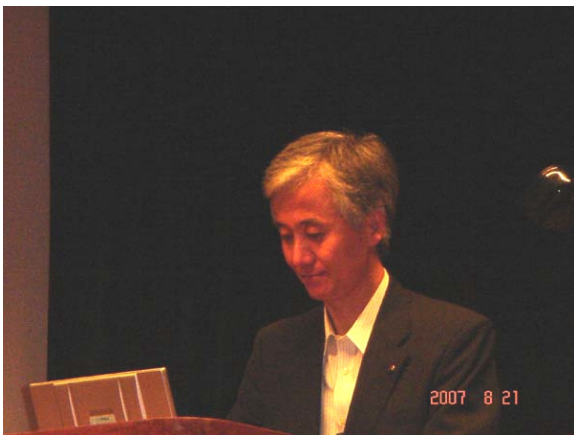
一件目は、松沢哲郎氏から「チンパンジーの親子と文化」という演題でご講演いただいた。日本から世界に発信する霊長類研究、とりわけチンパンジーの心のはたらきに関する比較研究を通じて、化石には残らない心の進化を科学的に明らかにしようという比較認知科学に基づいた深みのあるお話をうかがった。チンパンジーはヒトと 98.77% DNA が一致し、道具を使い、一部の文字を理解するが、この知性がいかに世代間で伝搬して文化を形成するかの研究は、教育の視点からも興味深いところであった。チンパンジーの親は、教えない教育、手本を示す、そして子供は見習う学習、自発的にまねる、この教育の成功する要諦は子供に対して親が徹底して寛容だということだそうだ。

二件目は上野山雄氏より「プラズマテレビの最新動向と将来展望」という演題でご講演いただいた。今現在のテレビ技術は、大型化とデジタル化が同時に進んでいる状態で





(a) 京都大学 松沢哲郎 氏



(b) 松下電器産業(株) 上野山雄 氏

図7 特別講演講師

あること。液晶との住み分けについては、37インチ以下をパーソナルユース、37インチ以上をリビングユースとして差別化し、動画応答性にすぐれたPDPは後者をターゲットとしたこと。PDPは、動画応答性に加え、深い黒、広視野角などが特長であるが、これに加えて、今後は大型ディスプレイ特有の指標として臨場感を重視していることなどが述べられた。新しい技術として、軽量・フレキシブルに向けて、プラズマチューブアレイに関する最新技術の紹介も行われた。この他、プロセス技術について画素を加工するための工程がフォトリソグラフィ技術を応用したものであることなど、詳細な製造技術についても触れられていた。

本大会では大会参加者だけでなく、一般市民の方にもお聞きいただける市民開講講座として特別講演を企画しているが、一般の方にも十分楽しめる講演内容であったと思う。特別講演会は参加者約300名弱と盛況で終了した。

**〈4・3〉 懇親会** <担当：大橋> 特別後援会に引き続き、すぐ隣にある大学施設である研修センターで懇親会を開催した。開宴までの時間、アトラクションとして大阪鶴橋若中会によるだんじり囃子と踊りが行われた。大阪情緒あふれる囃子と踊りを堪能した後、大阪締めを行って産業応用部門の今後の発展を祈念した。そして予定通り18時に開宴した。大会実行委員の大橋俊介氏の司会進行で谷口



図8 懇親会での歓談

勝則大会実行委員長の開会挨拶に引き続き、斉藤涼夫産業応用部門長、開催校の西川禎一大阪工業大学学長、仁田且三電気学会会長それぞれのご挨拶をいただき、八木重典関西支部長の音頭により乾杯を行った。その後歓談に入り、大阪名物たこ焼きの屋台なども交え、食べきれないほどの数々の料理に舌鼓を打ちながら会場は大いに盛り上がった。その後YPC授賞式が行われた。上田茂太論文委員長より14名の受賞者と受賞タイトルの紹介があり、賞状およびIEEE IAS Japan Chapterより副賞が贈られた。そして次回大会実行委員長である高知工業高等専門学校 野村弘氏より高知の紹介、心のこもった歓迎の言葉が述べられた。最後に入江寿一大会副委員長の万歳三唱で懇親会の閉宴となった。

## 5. その他の行事

**〈5・1〉 部門広報活動** <担当：上田> 産業応用部門の広報活動として、13ある技術委員会の活動状況および広報を目的としたパネル展示を大会期間中(1日目12:00~3日目14:00)に行った。今大会では、休憩室を展示場所として利用し、休憩中にも自由な雰囲気でもパネルを見学できるように配慮した。

**〈5・2〉 子供理科教室** <担当：三浦> 今年で12回目となる子供理科教室が、部門大会前日の8月19日(日)に大阪工業大学にて開催された。総参加者数192名の父兄と児童(児童112名、父兄80名、合計82組)、「手作りマンガン電池(協力：電池工業会)」と「電気二重層キャパシタを用いた充電式ミニ電気自動車」を題材に、午前・午後の2回に分かれてそれぞれ3時間におよぶ工作にチャレンジした。途中、「スイッチが入らない」、「真っ直ぐに走らない」などの問題が発生し、子供たちよりも工作に熱くなる父兄がいらっしやったグループもあったが、今年はインストラクタとして学生諸君の他に、4名のIEEJプロフェッショナルの方々からの協力も得たこともあり、全員が無事電池と電気自動車を完成させることができた。完成した電気自動車によって行われたタイムレースは子供たちの歓声



図9 子供理科教室

に包まれ、タイムが記録された完走認定書を手にした子供たちのうれしそうな笑顔を見てご父兄の方々もたいへん満足そうであった。なお当日の様子は翌日の毎日新聞地方版に写真とともに大きく紹介され、電気学会の活動を広報する良い機会となった。

#### 〈5・3〉 見学会（テクニカルツアー）〈担当：岸本〉

今回、部門大会が大阪で開催されるにあたり、その近辺も含めた京阪神地域の中で、神戸市周辺にスポットをあて、今ホットなエネルギー関係施設や、空港・港湾施設といった普段見学の機会が少ない施設を含めた見学会を企画し、大会終了の翌8月23日に実施した。

内容としては、まず、神戸市における電力需要のピーク時の約70%が供給可能という神戸製鋼神戸発電所およびエネルギー関連の体験学習ができる灘浜サイエンススクエアを見学、次いで、昨年開港した神戸空港で普段立ち入れないエリアにある電気設備等のエネルギー関連施設を見学した。さらに、船を貸切らせていただき、海上よりコンテナヤードや造船ドックなど神戸港の港湾施設について説明を受け、最後に、白鶴酒造資料館にて、酒造工程展示の見学と灘の生一本の試飲を行い、見学会を終了した。

参加人数は、保護者同伴の小学生も含めて最終23名で、昨年度に比べると少なめであったが、各見学先・関係者の全面的なご協力のおかげで、大変有意義な一日とすることができた。ここに深く感謝の意を表します。

〈5・4〉 企業展示 〈担当：山本〉 大会期間中に恒例の企業展示会を開催した。展示会場を一階エントランスホールに設定し、参加者が会場の入退出時に必ず展示会場を通過するように配慮した。このため多くの方に来場していただくことができた。さらに、各講演の終了時間がほどよく分散しており、見学が一時に集中することもなく比較的ゆっくりと展示内容の説明を受けることができた。このような要因により、従来以上に活発な雰囲気を感じられた。

今年は当初計画よりも申し込み数が多く、最終的な出展社数は17社、総ブース数は15ブースとなった。そのためブース数を増設して対応している。展示内容は従来のように、計測器・設計支援や解析ソフトウェア・および素子や

機器の製品など様々な種類があった。これは、産業応用部門の分野の広さを反映しているものと感じている。また、近年は広告よりも企業展示の申し込み数が多くなる傾向がある。これは、単に製品をPRするだけでなくお客様の意見や反応を直接得ることが重視されてきているものと推測される。年一回、産業応用分野の技術者が一堂に会するこの機会を、今後も有効にご利用頂きたいと望む次第である。

今年も無事展示会を開催できたのは、参加企業の方々の周到な準備と現地実行委員の十分に配慮した会場設営によるものである。紙面を借りてご協力に感謝いたします。

## 6. アンケート 〈担当：上田〉

次年度以降の参考のため、各セッションの座長から状況報告いただいた内容などを総括して述べる。

(1)全体的に会場が広く大変快適な環境でセッションが進行した。(2)若手の参加も多く活気が感じられた。(3)4分の質問時間は短く十分な討論ができない。(4)休憩時間を設ける余裕がなくスケジュールが厳しい。(5)マイクが発表者のみ1本であるため人数の多いセッションでは質問者の声が聞き取りにくかった。(6)プロジェクタとパソコンの接続不具合が初日にいくつかのセッションで発生した。事務局の迅速な対応でトラブルはすぐに解決したが事前確認は十分に行っておく必要がある。(7)YPCの実施方法に関する新しい試みとして、前半後半にコアタイムを設ける方式は若手相互の討論を活発にすることができ有効な方法であった。

## 7. おわりに 〈担当：谷口〉

不快指数の高い高温多湿の大阪の夏はよく知られているが、今年は全国的に記録的な暑さの中、本大会もご多分に漏れず酷暑の中での開催となった。また、会場の大阪工業大学大宮キャンパスは大阪市内に在りながら、交通の便はあまりよい場所ではないにも関わらず、多数の参加者を得たことは幸いであった。参加者にできるだけ快適な会場提供ができるよう、食の大阪に相応しい食事と広い会場の提供を関係部署にお願いして大会を実施した。

一部にほぼ満室のセッションがあったが、全般的には余裕のある部屋で熱心な研究発表が行われていた。とくに、次代を担う若手エンジニアの発表であるYPCの論文数が増えたことは大変喜ばしいことである。また、大会期間中に配布した無料昼食券は参加者から大変好評をいただいた。大会の新しい試みとして実施した入会キャンペーンでは15名が電気学会に新規入会いただいた。

このように、多くの成果を得ながら大盛況のうちに大会を終了できたことは皆様のご支援とご協力のおかげであり、厚く御礼申し上げます。また、大会の準備と運営にご尽力いただいた実行委員の皆様、論文委員の皆様、そして発表者、参加者の皆様に深く御礼申し上げます。さらに運営を手伝っていただいた電気学会事務局、学生スタッフの皆様にも心より感謝いたします。

(平成19年9月26日受付)